

かたりば通信

～震災を生き抜いて～

9
2011
 発行者：東日本大震災女性支援ネットワーク 編集：メディアチーム
 連絡先 〒113-0023 東京都文京区向丘1-7-8 電話 03-3830-5285 Email: office@risetoegether.jp.org twitter: @risetoegetherjp http://www.risetoegether.jp.org/

大震災から6カ月の被災地で、女性たちはいま・・・

震災から半年過ぎました。被災支援開始から5ヶ月です。お抹茶、手芸、ハンドマッサージ、ネイルケア、そして全国の人々からの愛の詰め合わせを避難所に届けました。

9月ようやく仮設住宅でサロンを開催しました。避難所で会った方に再会しました。しかし先週は、女川ではまだ避難所生活が続いており、100名も残っており、10月末に仮設住宅が完成予定です。

これまで全国の方と一緒に、宮城各地を訪ねました。被災を見て伝えて欲しいのです。さすがに日

を追って被災地風景は、表情が穏やかになっていきます。夏草が消えた住居後を被っているのです。緑多い長閑な過疎地に見えてしまいます。

「違う! 違う! ここは住居が並んでいたのよ。沢山の人の生活があったのよ」と必死に説明しました。

また複数の方より「被災地の販売作品はありませんか」と声をかけていただきました。でもまだようやくお針箱やミシンをお渡した段階で、販売できる作品まで至っていません。

再開した海苔屋さん以外に販

みやぎジョネット やはたえつこ

売できるものはありません。

被災地と遠い県の方々を結んで思うことがあります——現地が切望しているテンポで支援の道具が集まる訳ではないこと。遠くの方が思うほど、販売品を作れる環境ではないことを——。

「だからこそ伝えなくては」と思います。「そうか被災者のアドボカシーなんだ、DVの支援と同じだな」と思います。ささやかな励みですが「楽しかったよ、仮設になっても来てね」と言われます。もちろん行きたいと思えます。

震災から半年が過ぎて今思うこと

しんぐるまざあずふおーらむ福島 國分千恵

気が付けばあれから半年がすぎた。

福島県は地震と津波と放射能の大打撃をうけ、今現在、多くの人々が大きな不安を抱えながら明日を信じ懸命に生きている。

しかし半年たった今も、目に見えない放射能が、どこまで私たちの環境や身体を蝕んでいるのかわからないという不安は言葉に出さなくとも四六時中つきまとっているのである。

「このまま、ここに住んでいて良いのだろうか？」

「この野菜、肉、お米…食べていいのだろうか？ 子供に食べさせても良いのだろうか？」

私の住んでいる地区は避難地区には指定されていない。しかし夏が過ぎもう秋だというのに夜になり街灯に集まってくる虫が一匹もない。毎年、小さな虫や蛾などが誘蛾灯に誘われ集まりバチバチと音を立てている光景は、今年は見られないのだ。小鳥もだいが姿を消した。

県外に避難している母子もまた不安や戸惑いを隠せない。

きっと正しい判断をしているにもかかわらず、「戻るべきか？ このまましばらく二重の生活を続けていくべきか？ それともいっそ移住したほうが良いのか？」常に心の中で自問自答を繰り返す。

政府も東電も偉い学者もマスコミも、水も空気も食料も「基準内でするので大丈夫です」と言う。それならば、どうかこの地に引っ越してきて欲しい。原発の前で会議をし、親戚や家族を連れてきて、この地で採れた作物と一緒に食べ生活して欲しい。

そうして、「安全です」と言って欲しい。

汚すのも壊すのも簡単であるが、失われたものを元に戻すのはかなり困難である。

一日も早く、皆が安心して生活できる日が訪れることを子供の笑い声が聞こえる日常が戻ってくることを、心から願っている。

チーム報告

支援チーム

8月の終わり、沿岸部で相談室を開設した岩手の支援団体の方と知り合いました。仮設住宅に入られた方の支援をしている中で、これから冬に向けて「こたつが欲しい」と言われるそうです。狭いので、小さなこたつが求められるといひます。

東京に戻って心当たりをいくつかあたり、何とかストーブとこたつをお送りすることができました。「こたつとストーブ」は着いてすぐに、もらわれていったとのこと。

しかし、怒りも聞きました。現地の支援団体の女性がこう怒っていました。

「被災者に自己責任っていう人、おかしいと思わない？ 仮設の方がお金がいるんだもの、『いつまでも物資を送るのはいけない』なんていう人、全然分かってないよ。必要なものをいつまでも送ってあげたっていいじゃない。何から何まで必要なんだもの。」

当ネットワークでは「ボランティア派遣」に取り組んできました。避難所から仮設住宅に移られた皆さんに、顔の見える現地支援団体との関係を作りながら、これからは特に女性たちに「必要なものを届ける活動」がしたいと思っています。

調査チーム

震災直後の救援やその後の支援活動の経験を聴く聴き取り調査を、岩手県と宮城県を中心に行ってきました。6月の調査開始以降、これまでに25人の支援者が参加してくださいました。避難所での生活に必要な物資の手配と配布、スペースの活用、女性に負担が集中しがちな炊き出し当番の問題への対処、被災者への相談、母子や高齢女性、障がい者への支援、女性のニーズの把握、産業や雇用の復興など、様々な視点から支援の経験をお聞きしてきました。救援や復興の仕組みのなかにジェンダー・多様性の視点が確立していない中で、時には自らも被災しながら、弱い立場にある人々に届く支援をしようと懸命に努力してこられた支援者の皆さんのお話は、これから政策を改善していくのに不可欠で、大変貴重なものです。この調査はこれからも続きます。

調査チームでは、11月に中間報告会を予定しており、それに向けてお聴きした話を整理しています。

「災害・復興時における女性・子どもへの暴力に関する調査」は、10月中に調査を開始予定です。

メディアチーム

震災から半年が経つので、被災地の女性たちから原稿を寄せてもらいました。それは、生活が元に戻らないもどかしさが伝わるものでした。生活にも、感覚にも、被災地と都心にある政府やその周辺にいる私たちとの間には、かい離があるように感じました。「毎日が戦場なんです」と言っていた被災地のある女性支援団体のスタッフ。本当に息をつく暇もないという毎日のようです。こういう言葉を、いろんな形で、もっと多くの人たちに伝えていかなければならないと痛感しています。

また、被災地には、同じような気持ちでいる女性が多くいることと思います。彼女たちが、お互いの声を探し当て、その声を届けられるよう、メディアチームから機会や場所を提供していきたいと思っています。

研修チーム

夏休みを前に、ボランティアに向かう学生にジェンダー・多様性の視点について研修を実施しました。

80人ほどの学生・教職員の皆さんと、今回の被災の規模や、その地域の特徴、支援の進行状況などをおさらいし、特に現地ではどのような方々がより厳しい状況に直面してきただろうかと、資料をもとに考えました。高齢者や障がい者、外国籍の方々の状況などを確認。避難生活の過酷さを、具体例を元に色々話しあいました。

参加者からは、特に女性に強いられる不自由や不安、子どもたちのためにできることなど意見が出ました。

後日参加した学生たちから、この研修を受けたことで現地を見る眼が広がったという声が届きました——避難所に宿泊したので、仕切りはあっても男女一緒にプライバシーもないため1週間で参ってしまった。改善の求め方がわからず、数ヶ月を過ごした被災者の方々の大変さを痛感した。生理中だったので、がれき撤去現場のトイレ事情を知りたくても、男性リーダーに確認できず不安だった。リーダーに女性が不可欠ということ、あらかじめジェンダー・多様性の視点を持って向かうことの大切さ、支援プログラムを作っていくうえで多くの学びがあったとのことでした。



『かたりば通信』では、被災地で生活するみなさんからの記事、映像、川柳や短歌、詩などを募集しています。今後、応募された作品でコンテストなども開催予定です。作品は、東日本大震災女性支援ネットワーク・メディアチームまでお寄せください。
Email: media@risetogether.jp Fax: 03-3830-5285

まだ遠い復興の道・・・ 今こそ取り組むべき女性のエンパワメント

8月13日から2泊3日で東日本大震災女性ネットワークのボランティアに参加した。

同行するメンバーはフェミニスト情報紙編集長の方、中国出身の気功師の方、八王子自治労職員の方、そして大学の同窓生たち、とても色濃いメンバーだった。

お盆の帰省ラッシュの真っただ中、約10時間をかけてやっとたどり着いた仙台。有名な並木通りはやはり大きく、近くの繁華街は若者で賑わっていた。まだ余震の絶えない被災地のイメージとは程遠く、人々の活気あふれる姿に自然とワクワクしている自分がいた。

8月14日、いよいよボランティアの日。午前中は石巻の被災現場を見て回った。高台に残った唯一の病院。テレビで見た病院だろうか。そのすぐ下の薬局は看板を残して店の跡形もない。まるで海外の戦場のような光景。

泣けてきた・・・すさまじい光景とは対照的な静かな波の音。ここで命を落とした人々を思うと、「もう行くよー」と言われてもなかなかその場を離れることができなかつた。車から見る被災地の光景。日本とは思えないけれど、日本だから海外とは違うよなと思っていた。し

かし、アンテナショップで地元の人々が方々からかき集めた生活用品や食材で作ったお惣菜を売って、精いっぱい生きようとしている人々の姿はアジアやアフリカの国々で見た人々の姿と同じだった。

午後は石巻湊小学校で初めての女性サロン開催。お盆中で人影はまばらだったが、女性サロンの開催の噂を聞きつけて10数人の女性が来てくれた。私はメイクを担当したが、暑いこともあり、なかなか希望する人がいなかったのでもずはネイルをやる女性への肩揉みから始めた。次は手芸をやる高齢女性への肩揉み。みんな本当に真剣に軍手のクマの人形を作っている。できあがったクマの人形で「こんにちは、〇△さん」と友人に呼びかける高齢女性。見ず知らずだった女性たちが避難所生活を通して、今では深いところで通じあっているのを感じる。手芸を通して表情が変わってくる女性たちと共に、自分もイキイキしていくのを感じた。

2日目の最終日は被害のひどい気仙沼への大移動。予想以上に時間がかかり物資を置いてくるだけになってしまったが、道中目にした被災の光景は石巻以上にひどかった。ここまできると田んぼにある不自然な船や車にはあまり驚かなくなっていた。中がすっぽり抜けた建物に囲まれて、唯一プレハブを構え元気に営業する海苔屋の女性た

ち。「津波のバカ!でも頑張る」という道路に掲げられた横断幕のメッセージが浮かんだ。

このボランティアを通して、自分の目で見なくてはわからない被災の状況、そしてそこで暴力を乗り越え、暮らすたくましい女性たちに出会うことができた。正直ボランティアのコーディネーションはあまりよいとは言えないけれど、みやぎジョネットそしてハーティ仙台的ミッション、東北のひとりひとりの女性のエンパワメント(女性たちは自分自身を取り戻すこと)が実現し、ひいては世界の女性への暴力防止につながるよう今自分にできることをしていきたい。(石山亜紀子)

自分を見つめる
川柳で癒されよう

大地揺れ人生揺れても東電は死ぬなよと崩れた墓標の下の声
瓦礫道父母なき子にも朝の蜜
脱原発叫ぶわが子のどの腫れ
てんでんこ 爺の教えで 助かった
夢にまで津波が襲い眼を醒ます
子のためと孟母三遷疎開決め
復興の先に見える脱原発
わから愛
白真弓

～いろんな生き方があっていい～

カフェ放せてれれ代表 下之坊修子

「何でもいいと言うよりは、女性やマイノリティの人が発表出来る場を意識的に作りたかった」と話す大阪市のカフェ放せてれ代表・下之坊修子さん。いろいろな女性を撮影させてもらいながら、その生き方を多くの人に知ってほしいと言う。「知ることで共感し、一緒に動く力になる」という下之坊さんお勧めの多様な生き方を描いたドキュメンタリー映像をご紹介します。

『ここにおるんじゃけえ』 下之坊修子監督



脳性マヒの女性の日常を追ったドキュメンタリー。20歳のころ施設に入る時、生理の世話がたいへんと強制不妊手術をされた。悔しい思いを抱えながら、24時間介護を受けながら猫と二人暮らしをしている。

60歳を過ぎた今、髪の毛をピンクに染め、ジーンズをはいて町に繰り出す。そんな彼女の体はどんどん動けなくなる一方だが、行きたいところへ行き、したいことをしている。彼女の生き方から本当の自立とは何か、本当の自由とは何かを教えられる。

『アパレル・サンキュー (産休)』 オトーニョ (女性グループ) 制作

産休をとろうとしたら会社から辞めてくれと言われたあるアパレル業界で働く女性。現在闘っています。それを支援すると同時に、カフェ放せてれれを観に来る多くの女性たちに、泣き寝入りしないよう伝えるために作りました。

『私たちの選択 シングルマザーを生きる』 しんぐるまぎーず・ふぉーらむ制作

経済的にはめっちゃしんどいけど、子ども母もめっちゃ自由！三日やったらやめられない。シングルマザーにカンパ～イ！
カフェ放せてれれで上映

カフェ放せてれれ <http://www.terere.jp/kokonioru.htm>

マイノリティが自ら情報発信しようと作品を集めて、カフェなどで定期上映し、上映後お話をする活動です。

様々な困難をのりこえながら

NPO法人参画プランニング・いわて 理事長 平賀圭子

3月11日の東日本大震災の発生以降、私たちは被災地の様々な女性たちと出会ってきた。想像を絶するような困難の中で、女性たちは実にたくましく生きていた。

一人ひとりに被災の状況を聞くと、生き残ったことが不思議に思われるような状況をくぐり抜けた人が多い。子どもを助けることは出来たが親を助けることができなかつた、と悔し涙にくれる人もいた。

しかし、今後のことを考えて、

皆実に前向きであることに驚かされた。そんな中で私たちは後方支援をしっかりとやらなければならないと毎日頑張っている。

被災地での女性たちの仕事起こしとして、避難所を訪問して安否の確認をしながら買い物の代行を請け負う仕事を3か所で立ち上げた。女性たちは被災者の役に立つことに喜びを見出し、張り切って仕事を続けている。

その一方、心の病を引き起こしているのではないかとと思われるよ

うな状況もあり、「女性のこころのケアホットライン」で悩みの相談に応じている。最近、宮古市と盛岡市で面接相談も始めた。今後、息長く相談を継続することが課題である。

震災直後から、さまざまな支援物資を送ってくださったたくさんの方々を支えられて、私たちの活動も今日まで続けてこられた。多くの方のシスターフッドの素晴らしさを感じるとともに、勇気をいただいたことに深く感謝している。